武蔵野幕屋　木曜祈祷会
知言信行一如
――ヨハネ黙示録第３章７～13節――

１９５７年９月19日
小池辰雄

知言信行一如　キリストの霊のパプテスマ　一般の無教会と私たちとは違う　神の聖所の柱

【ヨハネ黙示録３】

7ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。
「聖なるもの真なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者かく言う、8われ汝の行為を知る、視よ、我なんじの前に開けたる門を置く、これを閉じ得る者なし。汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき。9視よ、我サタンの会、すなわち自らユダヤ人と称えてユダヤ人にあらず、ただ虚偽をいう者の中より、或者をして汝の足下に来り拝せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。10汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんじを守りて、地に住む者どもを試むるために全世界に来らんとする試練のときに免れしめん。11われ速かに来らん、汝の有つものを守りて、汝の冠冕を人に奪われざれ。12われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、すなわち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを書き記さん。13耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」

●知言信行一如

これはヒラデルヒヤにある教会の使いに書き送ったものです。

7ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。
「聖なるもの真なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者

イエス・キリストですね、

かく言う、8われ汝の行為を知る、

と言われて、ヒラデルヒヤの教会の人たちが如何に実存的な教会であったことを思います。非常にここでは、御霊のキリストはヒラデルヒヤの教会を評価しておられるようです。まさに知行一致、信行、言行一如の、知言信が行と一つになっているような、即ち

「キリストがわが知、キリストがわが言、キリストがわが信である」という、キリストを智慧とし、言とし、信として掴むところには、同時にそれが行である。その意味において、私たちはもはや聖書の言に躓かない。

即ち、信仰と行為とか、あるいは言と行為とか、智慧と行為とか、という二段構えの解釈からはむしろ抜けて、ある意味においてはパウロ先生の言い方、考え方をもうひとつ突き抜けたような――その点でやっぱりヨハネというのはなかなかすごい――そういうところに来ましたから、信仰の事態が、信ずることが即ち行であったという、内的な行であり、内的な智慧であり、内的な言の化体であるというわけです。そういったことで、

「神の言を守る」

ということが本当に

「神の言の中に入って」

そこに、ちょうどコケが岩に蒸し付いているような具合に、言の中に私たちが染み込んでしまっているような在り方にだんだんなってまいります。

●キリストの霊のバプテスマ

この間、塚本先生の書いた『キリストの誤解』という論説をよんだ。上下になっている。それはなかなか先生は、いいことを言っているんだけれども、どうしても一歩足りない。結局、塚本先生もやっぱり、せいぜい心の面でものを言っている。御霊のところに突っ込んで、そこからものを言っていない。だから、どこかで誤魔化しが来ている。どこかで力が抜けている。

そういうことはまぁ私たちなら、そこが先生に、その欠陥が読めるけれども。ところが、そう言ってはわるいけれども、聖書知識でも非常にアレしている人は、これが最上のように思っているらしい。私たちが勿論、お互いさまに最上だなんて思ってはいない。

これは限りない世界で、どこでいいなんていうことではないけれども。しかし、その限りなさということのわけが、限りなさという質がわかってきたんです、私たちは。だから、この限りなさの気合がわかってきましたから、その限りなさというものを持たないような、ある気がきいたようなものの言い方では、どうしたってそこには力が来ない。

例えば、山上の垂訓で塚本先生は、

「大分、自分は聖書をそのまま読めるようになった。神学者の如くならで、幼な児の如くに、これをそのまま読めるようになった」

という。それは先生の角度はいい。角度はいいんだけれども、そのまま本当にそのまま読めるようになるということのためには、やっぱり、キリストの霊のバプテスマというところに先生が大胆に入って、そしてそこからものを言い、それを告白するようにならなければ、「そのまま」といっても、文字が気持の上で、心の上であって――「そのまま」で、それは

いいんだけれども――やっぱり相は一つズレている。

ある点では、先生にも確かに楽なところの気持もわかってきたでしょう。けれども、やっぱり一切を包括してしまうというような、ものすごい把握の仕方は出てこない。

「幸いなるかな、悲しむ者」

とあれば、

「悲しむことが幸いだ」

と塚本先生は言っておられる。だけど、キリストは、

「幸福なる哉、悲しむ者。慰めを得べければなり」

と書いてある。塚本先生は、

「悲しむことが、そのまま幸福だ」

と、なんか深そうなことを言っているようなんですね。しかし、キリストがなぜ、

「悲しむことが幸福である」

かと言われると、

「慰めを得べければなり」

と書いて在る。即ち、悲しみにおいてですよ。

ところが、その「慰めを得べければなり」とはこの世的な慰めではないんです、キリストは。悲しみというものを通して、その「慰めを得べければなり」という慰めは、

「この世の如何なるものも与えることのできない慰めが来る」

というのです。塚本先生は、

「一般に、人は悲しむ者は幸いだ。慰めを得る――まぁ天国へ行けばそういった人は大いに笑うから――いや天国でも同じように悲しむ者は幸いなんだ」

というような、妙な言い方をしているんです、それは天国においてもと。

本当にこの地において、悲しんでいた人、あるいは今、悲しんでいる人がその悲しみの中において、全然質のちがった慰めが来るんです。キリストが言われるところの勝利、歓喜、生命というものはみんなその現実において必ずそこに来る。そして、そこから逆に相手を化していくという、ものすごい積極的な力というものを、やっぱり塚本先生は説くことができない。

●一般の無教会と私たちとは違う

私は先生のことを、何かと言っているんじゃない。ただ問題は、一般の無教会は――塚本先生がその無教会の中でなかなかいいところへ行っていらっしゃるんだけれども――一般の無教会と私たちとは違うということを申し上げるために、失礼だけど、先生の例をとっただけの話なので、そういうわけです。

ねぇ、そうでしょ。皆さんは、そいつ〔慰め、み霊〕は来たでしょ。だから、何かいろん

なことにでっくわして、それで、ぐっとそいつを呑み込んで、そして、ぐうーっとやっているうちに、キリストの生命がきますよ。そうするともう、どんな現実においても、ぐーっと荷っていく。これは不思議ですね、正直。まぁ私なんか50才になってやっとそこへ来たようですが、皆さんは若いうちに大分、そこへ来ちゃっているから、どうぞ〔そういうようにしてやってください〕。

それでいよいよこの、

10 **汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんじを守りて、地に住む者どもを試むるために全世界に来らんとする試練（こころみ）のときに免（まぬが）れしめん。**

全世界を試みるようなことがやって来ましても、その時に私たちが免れしめられるというのは、私たちの中にそのような一切のものに、通り抜けていくところの力が来ているからです。ただ「免れしめん」じゃない。それは原爆でもって私たちの肉体は参るかもしれない。けれども、そこのところを本当に勝利していくところの世界です。霊魂がどんな現実を通しても、なお突き抜けていくところの盛んなるものです。

私は幕屋の祈りの時に、

「新しく来た人たちのためにも、短く祈って、あまり『お父様！』なんてを連発するな」

と、この間、原君にも葉書でそう書いてやった。原君は大いに小諸〔小諸夏期特別集会〕からいい気持でやって来たところが、私に一番さきに小言を言われてしまった。

「原君、そりゃ、君の熱心はよーくわかる。君の祈り、君自身については何も私は言わない。けれども、やっぱり新しい人がいてね、そして、君の祈りは長すぎたよ。またあんまり『お父様』を言い過ぎちゃった。神様の名はあまりみだりに挙げない方がいいよ」

と。まぁ原君はよくわかってくれて、葉書で感謝してきましたけれども。

それだから、妙な青年がサァーッと立って、憤然として出て行っちゃった。だから、青年にも私は言ってやったですよ、葉書で。その後、来ないですけれども。来なけりゃダメですよ。あれは矢内原先生の集会の人です。

まぁいろいろな先生がいますよね。私が雑誌を送ったら、

「雑誌はもうたくさんだから」

なんて言ってくる先生もありますし（一同失笑）。これはいいです、何と言われても。これは「言い逆らい」です、これも。

いろいろなことがありますけれども、どうか、皆さん、臨機応変にね、宜（よろ）しきに適（かな）うようにひとつやってください。そしてまた、こういう内輪の祈祷会には――ここではお隣も近いから、あまり大きな声を出さない方がいいけれども。荒井君あたりの所へ行ったら、大きな声を出して――要するに、そういうところを自由自在にひとつ〔やってください〕。私

はもう皆さんを大分、評価しているんですからね。だから、小言を言うんですよ。評価してなければ、小言は言わんです。

●神の聖所の柱

このヒラデルヒヤに言われている言は、なかなか味がある言です。この七つの教会のうちで一番よく祈っている。

11 **われ速(すみや)かに来らん、汝の有(も)つものを守りて、汝の冠冕(かんむり)を人に奪われざれ。**

12 **われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、**

「神の聖所の柱とせん」

という。私たちが神の聖所の柱とされる。隅(すみ)の首石(おやいし)はキリストです。その聖所の柱にされるというわけですから、いま現にこの地上において私たちは……〔以下録音切れ〕……